

# シニアパワーと 未来をつくる

日本全体が抱える問題 — 高齢化 —  
町も例外ではありません。

高齢化が進み、生産人口が減少する。町や集落の行事に携わり、実際に動ける人が減っていけば、集落の活気は失われていってしまいます。そうならないために、何か出来ることはないでしょうか。そのカギは、元気に活動するシニアのパワーが握っています



演目(名前)の順で紹介(敬称略)

- 01 秋の色種(若柳和香)
- 02 刃傷松の廊下(内海道京)
- 03 宝船(長谷川利夫)
- 04 お初(日下光子、土屋千賀子)
- 05 母ざんげ(内海京佳)
- 06 桜狩(野矢ハルコ)
- 07 橋場の渡し(米村由美子、渡部正子)

町内4社中の師匠が競演  
祝舞「老松」で幕を開けた  
(左から)  
藤間紫真藤、花柳寿美衛、  
若柳和香、内海道京

現在町に住む百歳以上の高齢者は六人、八十歳以上になると一、七七六人。人口に占める六十五歳以上の高齢者の数を表す高齢化率は31%となっています。

## 豊かに生きる

んが、「お年寄りが元気に長生きできる町」であるなら話は別です。自分たちも健康であり、知識や経験を生かして、自分たち以外の人も元気にする。そんな活動をしているシニア世代の人たちが、町にはいます。

町内の日本舞踊四流派が一堂に会した「第一回いなわしろ日本舞踊各流派合同発表会」は八月二十三日、町体験交流館学びなで開催されました。

若柳流静舞会、花柳流みほ乃会、内海流道京会、紫派藤間流紫真藤会の会員が次々とステージに登場し、日ごろのけいこの成果を披露しました。

会場に詰めかけた四百人を超える観衆は、舞台上で繰り広げられる華麗な舞に酔いしれました。



発表会の終了後、会場を出ていくおばあちゃんの言葉が耳に入りました。  
「〇〇さんもまだ元気で踊ってんでは、おれもまげらんにえな。足引きずってる場合じゃねえな」そう言って笑うおばあちゃんは、この発表会を見に来たことで、元気づけられたのではないでしょう

今回の合同発表会開催のきっかけは、町体験交流館の建設が決まった平成十八年にさかのぼります。新しい文化施設の建設に際して、自分たちができることを考え、合同発表会を思いつきました。

すぐに町内四社中の師匠会議を開き、発表会を通して地域の活性化と出演者の資質の向上に努めようと話し合いました。最初のころは、「私の教室はこうだから」と、まとまりづらい時もありましたが、大きな目標のために力を合わせていくことで、各流派の垣根を越え、発表会への不安と緊張を乗り越えることができました。

生徒には「他流派の踊り、他人の踊りを見ることも自分

たちの資質の向上につながる」と教え、年齢に関係なく、お互いに勉強をさせながら練習を重ねました。

踊りごとに効果的な演出を考え、舞台を引き立ててくれたスタッフにも感謝しています。シルバー人材センターではないけれど、持っている技術を生かして、舞台装置や小道具などを手作りで作ってくれた人もいます。

踊りにかかわるすべての人が、それぞれの持ち場で自分の力を発揮することにより、わたしたちも、スタッフも、豊かな心と健康な体を手に入れることができます。そしてお客さんも豊かな気持ちになる。それが素晴らしいことです。



合同発表会実行委員長  
若柳流静舞会師匠  
若柳和香さん







# 地域でつなぐ

高齢化がもたらすもうひとつの問題——限界集落——  
本町でも、雇用の減少や交通の利便性などを考え、  
若者の人口流失が続いています  
小さな集落や地域の伝統は  
このままなくなってしまうのでしょうか



達沢不動滝を見つめる小椋区長  
達沢集落は町の貴重な財産を守っている

取材を終えて

元気で頑張っているシニア世代が、こんなにたくさんいる。今回の取材を通してあらためてそう思いました。

日本舞踊という伝統を引き継ぎ、守りながら、自分の健康も守る。そしてそれを見る人たちにも元気を与える。

健康づくり、生きがいにゲートボールをしながら、地域のつながりをつくり、なおかつ、世代間の交流を持って子どもたちを守る。

さまざまな活動に見るシニア世代の活躍には、人生を豊かに生きるヒントにあふれています。人が豊かになるなら、町も豊かになります。

こういうシニア世代の人たちの知恵、知識や経験を、ほかのことに生かしてもらい、今後のまちづくりを進めていく。そのためには、シニア世代がまちづくりに積極的に参加できるシステムを構築することが必要なのだと思います。

特集 シニアパワーと未来をつくる  
おわり

限界集落とは、長野大学の太野晃教授（高知大学名誉教授）が、平成三年に最初に提唱した概念で、「過疎化などで人口の50％が六十五歳以上の高齢者になり、冠婚葬祭などの社会的共同生活の維持が困難になった集落」のことを指します。

高齢化率31％の本町が、二十年七月に実施した調査では、人口の50％が六十五歳以上の集落は一集落。しかし、五年後の二十五年には八つの集落がその状況を迎えるという結果でした。その中の一つが、達沢集落です。町が誇る名瀑、達沢不動滝を抱える山間の集落ですが、人口、若者人口とも、徐々に減ってきています。そうした状況の中で、どうやって集落を存続させていくか。達沢集落の小椋隆夫区長に、集落の現状や取り組みについて聞きました。



達沢区長  
小椋 隆夫さん

## 高齢化は 避けられない

人口が減ってきているのはしょうがないと思います。町内全域がそんな状態でしょうから。仕事がなくて食べていくことができないのなら若者だって外に出るしかない。そうなると、地区に残るのはお

年寄りが多くなってきました。高齢化は避けられない状況でも、冠婚葬祭や地域の祭りなどは、地区内の助け合い、工夫や頑張りによって続けていけるのではないのでしょうか。達沢地区では、不幸ができた場合には、組長が中心となって葬儀を執り行います。昔から行われている「知らせ」などは残っているし、まだま

できます。問題が起これば区長であるわたしや近所の人々が協力して解決にあたります。最近では葬祭場などがあるので、それをうまく利用すれば、そんなに困ることはないですね。

## それぞれが 補い合う

祭については、少しずつ形が変わってきました。昔は青年部が中心となって祭を取り仕切っていましたが、青年部も約十人ほどに減ったため、区や老人クラブが主体で運営します。

不動滝の祭りも旧暦で行われるため、平日に当たるのがほとんど。そのため、神事は老人クラブが中心で、直近の日曜日には青年部が出店を出すなどして、地区全体で協力しあいながらの運営をしています。

地区の人足も分業です。比較的若い人は草刈りや力仕事。お年寄りは改善センターの掃除などをする。こうすれば不平等な感じはないですね。

## 助け合い 暮らしていく

お正月、お盆など帰省するのを楽しみにしている人たちがいます。お盆なんかは地区の人口が倍くらいになります。町外に働きに出て行って、仕事がないために、戻りたくても戻れない人もいます。子どもたちやそういう人たちが帰ってくる古里だから、地区は元気に存続しているほうがいい。協力し合っているうちは、まだまだ限界じゃないです。子どもたちが帰ってきて、元気を回復する集落。そして自分たちも、まだまだ元気に暮らす集落。限界ではなく、元回集落になれるといいですね。

## 目指すのは 元回集落

こういう山間に住むのだから、お互いに協力していかなければ何もできなくなる。一人暮らしの人の家を、近所の人が見てあげること、畑で採れた野菜を近所で分けることなど、協力する形はいろいろあります。お互いに見えることを精一杯やれば、高齢者が多くなっても、みんなで暮らしていけます。